

20 世紀の神話

——プロパカンダ・スローガン・タイトルコピー——

Mythos の語史に関して（下）

天 沼 春 樹

1. 大衆の神話

言語学者フランツ・ドルンザイフは、Mythos というギリシャ語からの外来語に関してこんなことをいっている。

「Mythos という言葉は、近代にいたってさまざまな経緯を経てきた。150 年ほど前には、人々はこれを Hymne と同じ感覚で Mythe とよんでいた。すなわち、朗らかな古代人たちの素朴な作り話である。Mythus というラテン語表記で使うときは、神話学者の専門的な対象を意味した。しかし、専門家ではない者たちがこの Mythos を口にするようになると、この言葉はいわく言い難いあらゆるものを含んだ意味の織物になってしまった¹⁾。」

Mythos というものを思想史的にとらえる研究は、ヤン・デ・フリースの『神話研究史』(Die Forschungsgeschichte der Mythologie, 1961) が、きわめてスタンダードな神話概念史をホーマー、ヘシオドスといった古代から、20 世紀の神話学にいたるまで描いてくれている。人類がこのメタファーの織物である Mythos に、どのような解釈をほどこしてきたかを概観するうえでこのうえない手引きである²⁾。

ところで、Mythos の語史、とりわけどのようなニュアンスで用いられてきたかに、もっぱら焦点を絞って用例を集めるのが、拙論『神話概念の変遷Ⅰ』以来とりくんできたテーマであった³⁾。ドイツ・ロマン派にいたる時代と本稿でとりあつかう現代では、おのずとむけていくまなざしの方向も変わってこざるをえない。というのも、Mythos はもはや一部の学者や詩人たちのものでは

なく大衆の意識にまでものぼってくるようになるからである。

Mythos なる言葉が、ドイツ語での文献に現れるのは、16 世紀のダンボディウスの『独羅辞典』(Dictionarium Germanico-Latinum, 1536)⁴⁾までさかのぼることができ、その語義は、ラテン語の *fabula* と同一視され、「作り話」「ばか話」(*erdichte Märe, lataine Fabula*) といったネガティブな意味だった。その状況がその後 2 世紀ばかりつづくことになる。啓蒙主義の詩人たち、ヴィンケルマン、C. G. ハイネ、とくにヘルダーあたりから、Mythos を学問的にとりあげようという気運が高まり、ロマン派の人々において、Mythos への評価は絶対的なものにまで高められていくという経緯があった⁵⁾。しかし、それはあくまでも教養ある人士、学者、芸術家たちの範囲であって、広く一般大衆が Mythos という言葉を耳にし、あるいはそのようなものと自分の係わりに想いをめぐらすというようなことにはならなかった。神話は文芸や芸術の世界に表現される太古の美しい夢であり、それが日常の語彙のなかを潤歩しようなどとは思ってもよらなかった。けれども、ロマン派以後の《神話の発見》、神話という語彙でくくられる理想的始源の諸関係は、暫進的に人々の意識のうえにのぼるようになり、スチュアート・ヒューズ流に言えば、『実証主義への反逆』の思想の展開にしたがって、「現代の神話」を準備してきたようにも思われる。

近代の語彙としての Mythos について語ろうとするならば、ニーチェが『悲劇の誕生』のなかで、文化と神話、国家と神話のかかわりについてのあの有名な一節からはじめなくてはならないように思われる。

「神話 Mythos なくしてはどんな文化もその健全な創造的始源の力を失う。〔……〕我々の視野が神話で限られて初めて、文化の動き全体がひとつの統一体にまとまるのだ。〔……〕国家も芸術も、この無時間的なもののながれに身を浸し、そこで瞬間の重荷と欲望からのがれ、安静をみいだしたのだ。〔……〕空想とアポロ的夢幻のいっさいの力も、神話によって初めてやみくもに迷うことから救われる。神話の諸形象が、気づかれないが、いたるところに存在する魔神的な見張人になって初めて、その保護のもとに若い魂は成長し、その合図によって成年者は自分の人生とその戦いの意味を解くのである。国家で

さえも、神話的基础以上に強力な不文律を知らない。神話的基础こそ、国家が宗教と関連を持つこと、国家が神話的表象の中から成長してきたことを裏づけるものなのだ⁶⁾。」

この一節に、ミルチャ・エリアーデが手際よくまとめた神話の定義をひきくらべてみるとわかりやすくなるのではないだろうか。「神話は常に〈創造〉に関連している。それはものがどのように存在するにいたったか、行動型、制度、労働方式がどのように確立されたかを物語る。ちなみに、これが神話があらゆる重要な人間行為の模範となる理由である。神話を知ることによって人はものの〈起源〉を知り、それによって、それらを意のままに制御、操作することができる⁷⁾。」

Mythos を圧縮された世界像、現象の縮図と (das zusammengezeugene Weltbild, Abbeviatur der Erscheinung) とまで定義し、文化と国家の番人のようなニュアンスで述べているニーチェのいう「神話」は、まさしく神話が神話として機能している時代においてそうなのであって、その神話が化石として美しい形象はみせてくれているものの、生身の肉体でもって我々を抱擁してはくれない近代においては失われた神話との幸福な関係への郷愁にもきこえる。むしろ、生身の近代人が冷たい肌をした美しい化石に抱擁していくといったらよろうか。そのような意味において、我々はもはや神話を生きることはできないはずであった。つまりロマン派の人々から始まった神話のポジティブな扱いは、失われた理想を憧憬する行為でしかなかった。そうした幻想の理想郷をこの現実の世界にうちたてようとするならば、それは自分の内面世界でしかかなわぬことであるはずでもあった。Mythos が、ここにいたって「理想」という語義を獲得したにせよ、日常生活を Mythos とかわりをもたせようというのは度はずれて無理がありはしないか。

リヒャルト・ワーグナーの功績はどうだろうか。ワーグナーの楽劇のなかによびさまされたゲルマンの英雄たちのイメージが、まずは第一次大戦の暫壕のなかで喘ぐ兵士たちの脳裏に浮かんだかどうかは疑わしいとしても、大衆的娯楽（あるいは大規模に享受される芸術）のなかで Mythos が動きだしたことは

まちがいない。そして、また Mythos は、19 世紀末の精神科の臨床室で、深層心理と無意識の発見とどうじに「元型」として再発見されもしていた。異論の多いことであるが、現代に生きる一個人が、エディプス王と、そしてモーゼといった神話的人物の運命とむすびつけられることになった。それにしても、Mythos はまだ一部神話学者、思想家、文学者の語彙ではなかったろうか。精神科の診療室の外へ出できたり、一般大衆の眼にふれる印刷物に、あるいはなんらかの社会現象の場面におどり出てくることは考えられなかったに違いない。

政治スローガンのなかにこの語を用いた例は、フランスのジョルジュ・ソレルの用いた「ゼネスト神話」(Reflexion sur la violence, 1908 年)あたりが最初ではないだろうか。ソレルにとって、神話 Mythe とは、人間に持続的な行為をよび起こす強い力をもったイメージであり、それはすなわち階級闘争の困難な闘いの勝利を信じるための強い意思の表現もあった。ソレルの『暴力についての考察』のなかで展開された「神話の理論」は、のちにファシズムの理論武装に誤用されていくわけであるが、ソレルの発言はそれと同時に、我々の関心事である Mythos の語史のうえでも、この言葉が、政治や大衆運動の領域に登場したという点できわめて注目に値する。そして、すでに、神話という言葉に今日みられるような曖昧性が現れている。けれども、標語としての Mythos は、カッシーラーの言葉をかりれば、いわく言い難い情動を惹き起こし、人をなんらかの行動へと駆りたてるという意味で、効果的であり、大衆の扇動にはまことにつごうがよいものであった。

たんに「理想」というニュアンスを越えて、「神聖な事蹟」を暗示するスローガンとして使われはじめると、神聖という霧にかくれてその実態は曖昧模糊となる。そういった事例を、我々は『20 世紀の神話』というタイトルのもとに、108 万部も売れた(その全部が読まれたという意味ではない)あのローゼンベルクの著書にみるわけである。そのタイトル自体が、あのシュペングラーの『西洋の没落』という表題とまったく反対の理由によってドイツ国民にとって刺激的であったことは想像に難くない。Mythos der 20. Jahrhunderts の響きのなかに、なにか情動を惹き起こす要素があるとすれば、踏みつけられ、

栄光を失ったかにみえる現実からの救済を求める意識無意識の願望にはかなるまい。さもなくば、実証主義・合理主義精神の浸透したかにみえたこの時代に、このきわめて歪曲されたかたちの史観にもとづいた一種の非合理主義的信仰告白の書をまともに読むことなどできないのではないだろうか。それとも、合理主義・理性などというものは、あの1938年4月10日のオーストリアの国民投票のように、一夜のうちにかわってしまうほど脆いものなのか。

いずれにしても、そのスローガンの中心におかれている言葉が Mythos であったことは間違いない。これまで、16世紀からたどってきた Mythos の語義の変遷、いや増殖とでもいうべき流れのなかで、ひときは特異な場面にいたったわけである。

この、ローゼンベルクの『20世紀の神話』では、いかなるレトリックでこの Mythos が使われているかが、関心をもたれるところであるが、結論からさきにいってしまえば、きわめてたくみに、Mythos の曖昧性を利用しつつ、ドイツ人の心情に訴えかける語彙や比喩を駆使していることがあげられる。それは、ひとつにはゲルマン神話の形象であり、その形象と最近の歴史的事件をモンタージュすることによる意識の操作であろう。では、いったいどのような文言で、20世紀の神話が語られていたのだろうか。

〈世界大戦において名誉と自由との・ドイツの生活とドイツの国のために戦死した・二百万人のドイツの勇士の記念のために〉という献辞ではじまる『20世紀の神話』は、まさに一定の思想からしぼりだされ、捏造された印象を与える。〈新しい生命の神話から新しい人間類型を創造するこれが我々の世紀の任である〉といううたい文句も、響きのよいスローガンであるが、その本質はなにも語っていない。

「今日の神話 Der heutige Mythos は二千年前の人類の姿と同様にまさに英雄的なものである。世界のいたるところで、〈ドイツの理念〉のために死んだ二百万のドイツ人たちは、彼らが十九世紀的なものすべてを無価値なものにしたと告知し、また素朴な農夫やきわめて純朴な労働者たちの心に、北方的種族の魂の神話的創造力 *Die alte mythenschaffende Kraft der nordischen Rassen*

seele が、その昔ついにアルプスを越えたゲルマン人のなかに湧いたとおなじく生き生きと働いたということを告げている。〔……〕灰緑色の軍服をきたドイツの国民軍は神話を生みだす自己犠牲（献身）の証であった。今日の革新の運動はその数知れずと理解されはじめたあの二百万の死せる英雄がなんであったかを示そうとするものである。つまり新たな生の神話と生の宗教の殉教者であるのみであると⁸⁾。」

ここで、ローゼンベルクが Mythus というとき、それは「神聖な伝説」「偉大で神秘的力を秘めた本質的なもの」という、最高原理である。彼のいうところにしたがえば、我々の世紀のもっとも偉大な人とは、「力に満ちた神話的新形式 (machtvolle mythische Neugestaltung)」から出発し、ひとつの純粋なドイツ的文化の基盤に立った人ということになる。つまりは、彼が求めてやまない理想的な究極の存在形式を、Mythus の一語に集約してしまっているといえようか。それを、わかりやすくかみくだくことをせず、Mythus という記号にしてしまうかぎりにおいて、読むがわの人間に奇妙な心理、情動を惹き起こすことができるのだらう。

「我々はかくのごとき新しくて、しかも 古い血の神話 (dieser neue und doch alte Blutmythus) の幾多の偽物をみせつけられるのであるが、この神話はまた個々の国民の背後においても脅威を受けた。それはすなわち、1914 年の勝利せし軍隊の背後においていたところで、暗黒な悪魔のごとき諸々の力が活動を開始したとき、またかのフェンリス狼がその鎖をうちきり、ヘールが腐敗の悪臭をはなつて世界に姿を現し、さらにミドガルトの世界蛇が世界の海を鞭打ったといわれる太古の時代がまた始まったときをいうのである⁹⁾。〔……〕しかし、またこれと同時に、戦死した勇士たちのなかから生き残った人びとの、屈服せしめられた精神のなかには、かの英雄たちがそのために戦死した血の神話が、更新され深められて、最後の枝葉までも把握され体験された。今日においては、このような内面の声は 血の神話と精神の神話、人種と自己、民族と人格、血と名誉などのみが、まったくこれのみが妥協なく全生活を貫いてすみ、それを担い、それを決定せねばならぬことを要求する。この神話はドイツ民族

のために戦死した二百万の英雄たちは空しく倒れたのではないということを要求する¹⁰⁾。」

北方の人種の起源を神話的小説のアトランティスに想定し、その血の優秀さをその神話にもとめたローゼンベルクの著作から今日うける印象は、あらゆる浪漫的・神秘的な思想から都合のよい文句と語彙をかきあつめて、はりあわせた似而非オカルトの書、捏造の書というイメージである。そして、この書のもつ持ち味というか、魔力というか、人を惹きつける部分があるとすれば、該博な思想的知識を駆使した人種論の部分ではなく、Mythos をからめた語調のよいスローガンの箇所よりほかにはない。108万部の購読者のうちの何人がこの書物を最後まで読みとおし、あるいは読みとおしたとして、理解できたかは疑問である。

ローゼンベルクの Mythos は、欠くべからざる信仰、または靈感、または大衆の願望の統一、または真理よりも真実な民間伝承（ピーター・ヴィーレック）と評されるように、一種の秘蹟の言葉、お題目、念仏とおなじく唱えておればなにやらありがたい気持ちにさせるものであって、繰り返すうちにその意味内容は、ゲルマンの神々のイメージのなかに後退していつてみえなくなる。それと同時に読み手の気分は昂進されていくことになる。

Diese innere Stimme fordert heute, daß der Mythos des Blutes und der Mythos der Seele, Rasse und Ich, Volk und Persönlichkeit, Blut und Ehre, allein, ganz allein und kompromisslos das ganz Leben durchziehen, tragen und bestimmen muß. Er fordert für das deutsche Volk, daß die zwei Millionen toter Helden nicht umsonst gefallen sind, er fordert eine Weltrevolution und duldet keine anderen Höchstwerte mehr neben sich. (M. 699)

この上記引用部分のドイツ語の原文をドイツ人自身の眼でとらえたときの心理的効果は、我々外国語としてドイツ語を読んでいて、しかも歴史的経過を知っている者に与えるそれとはかなり違ったものであることは、いうまでもない。政治的意図を持った論説のなかにゲルマン神話の形象をモンタージュしていつ

たり、ニュース映画のドイツ爆撃機編隊の映像にワーグナーの『ワルキューレの騎行』をかぶせるといったナチズムお得意の手法を想起させる。

E. カッシーラーは、この第三帝国による神話の政治的利用を鋭く批判するなかで、ハインツ・ベヒターの手になる『ナチドイツ語。現代ドイツ語慣用語註解集』(1944 年刊) 引いてナチ言語の巧妙さを指摘している¹¹⁾。つまり Siegfriede と Siegerfriede の使いわけに端的にあらわれている用例である。どちらも「勝利によってもたらされる平和」の意味であるが、前者単数の Siegfriede は、純潔種たるドイツ国民による勝利であり、後者は複数のつまり連合国側の勝利を意味し、その背後の意味たるや雲泥の差があるという。さらに私見をはさませてもらえば、このナチスが好んで用いた Siegfriede は、あのニーベルンゲン・リートの英雄にして「背後からの一突き」によってたおれたジークフリート Siegfried と語末の e を異にしているだけである。イデオロギー・プロパガンダが声高に叫ばれると同時に、ゲルマン神話の幻影が意識の背後で動かされているとみるのは穿ちすぎた推理だろうか。

ともあれ、Mythos は街頭に出できた。きわめて危険なかたちで大衆化され、言葉の実態が曖昧なままひとり歩きをし、政治的に利用されるまでになったわけである。16 世紀には「愚にもつかない馬鹿斬」「誤てる教え」¹²⁾というニュアンスしかなかった言葉のいきついた先がここである。きわめて曖昧な概念を背負った記号としての Mythos は、さまざまにもてあそばれ、右にふれた振子の反動で Entmythologiesierung「脱神話化」(ブルトマン)が行われるようにもなる。そして、今日では、マスコミが好んで用いる語彙として、日常的なかに浸入してきているのである。

2. 現代における Mythos なるもの。

さて、以上のように、政治神話の時代につづく現代は、まさにその非神話化、脱神話化の時代とでもいうべき意味の相対化がすすんでいるといってもよいのではないだろうか。Mythos という用語は意味というよりニュアンスを伝える記号になってしまった観がある。それは、今日の巨大化したマスコミのなかに

しばしば登場して、読者の注意を惹きつけるときにのみ有効であるような語彙である。

言語学者ヴェールナー・ベッツは Mythos に以下の7つの意味に分類していみせてくれている¹³⁾。

- 1) Göttersage
- 2) Welterklärung
- 3) zeitgebundene Bibeldastellung
- 4) Wunderbare und/oder unerklärbare Geschichte von Ereignissen und Gestalten
- 5) Übermenschliche, tiefer und höher wirkende Gewalt
- 6) Massenpsychologische wirksame Vorstellung
- 7) Umgangssprache/Erfindung, Phantasie

ドイツ語ではないが、ロベール辞典の語義説明がむしろ一般にはわかりやすいので比較のために引用しておく。

①物語、寓話；神話とは象徴的な、素朴な、感動的な物語、ないし寓話であるといえる。②伝説；ファウスト神話，ドンジュアン神話，ナポレオン神話。さまざまな出来事の起こる必然性というこのつくり話。(Mart.du.) ③理想；我々の抱く今日の理想(Mythe)が人々を戦闘に導くのだ。(Sorel, G) ④神話は言葉のみを根拠としてしか存在せず，また存在しつづけることの無いすべてのものの名前のことである。(Valéry) ⑤神話とは今日ではかなり多くの人々にとって曖昧な考えだとか，嘘とか誤りとかを意味する。(Etiemble)

たとえば、「伝説」という意味では《Mythos Marlene Dietrich》というようなタイトルは，ことあるごとにこの伝説的女優に関する記事につけられる。86年にマクシミリアン・シュルによって映画化された彼女のドキュメント・インタビュー映画《MARLENE》でも，Das authentische Portrait eines Mythos. という表現で紹介されている。この種の用例には事欠くことはなく，集めたもののなかからアトランダムにあげてみても，アメリカンヒーローのワイアッ

トアープを扱った《Mythos um Wyatttearp》(SZ. 5. 3. 1977), 1920 年代の伝説的女流作家デュナ・バーンズに対するインタビュー記事のタイトルにおどる《Mythos der Nacht》(Die Zeit, 21. Dez. 1984) は、彼女の倒錯的作品『夜の森』(Nightwood, 1936) に由来している。

Mythos は文化芸能的分野にとどまらず新聞の社会面にも頻繁に使われて、《BBC-Mythos und die Wirklichkeit》(FAZ, 27. 4. 77) とかシュビーゲル誌の《Mythos Mercedes》(9. Sep., 1985) などは、一般のイメージと実態の差異を強調するときに好んで用いられるタイトルである。あたらしいところでは、エイズの最新情報を伝えるシュビーゲルの特集記事で、《Aids: Mythen und Fakten》(3. 12. Aug. 1985) と題して、エイズに関する様々な誤解や通説と事実を解説している。例えば、エイズは献血の血液を輸血されることで感染するという誤った認識を、連邦政府は献血血液のエイズ検査は厳密に行われていると打ち消し、一方感染の危険はホモセクシュアルな人たちに限られるという楽観論も否定するといった具合にエイズの Mythos と Fakt (事実) を明らかにするといった内容だった。

さきにあげたヴェルナー・ベッツの定義にあわせ、Handwörterbuch der deutschen Gegenwartssprache (Berlin, 1984) の解説の 2, 以下は、この Mythos という言葉が現代史のなかでくぐりぬけてきた経緯を知るものには、蓋し領ける説明であるだろう。

Mythos, der; -s, Mythen [my: ...] 1. mündlich od. auch schriftliche, in Form von Sagen, Dichtungen, Erzählungen überlieferte irrationale Vorstellungen eines Volks aus seiner Vorzeit, über die Welt, Götter und Menschen. 2. meist glorifizierte und oft kultisch verbrämte reaktionäre ideologische Legende zur irrationalistischen Dichtung und Propagierung historischer Erscheinungen: der Mythos Napoleons: der faschistische Mythos.

「神話, 1. 口承的あるいはまた文書で伝説, 詩, 物語の形式をとって伝承されてきた先史時代からの一民族の神々や人間についての非合理的観念. 2. ほと

んどは、歴史的出来事を非合理的に創作したりプロパガンダ化するための賛美され、しばしば崇拜に粉飾された反動的イデオロギーによる伝説：ナポレオン神話：ファシズムの神話¹⁴⁾。」

16世紀には、「作り話」としてのネガティブな意味でしか用いられていなかった Mythos は、近代にいたってそのニュアンスをポジティブなものに変えていき、さらには最高の位置にまでもものぼり、政治スローガンや大衆扇動の具として利用されるといったきわめて特異な語史を持っている。しかし、これは、ひとりドイツ語における Mythos にかぎったわけではない。日本語においても、外来語として明治時代に「神話」と翻訳造語された言葉であったが、それから四半世紀も経ずして国家的規模で「神話」が神聖化されていくという事実があった。この観念の器としての Mythos (神話)をめぐる諸現象は、たんに語史をたどっていくのみで終わるわけにはいかない。人間の様々な営為のなかに、くりかえし呼び返される神話的イメージを、ひとまずは文芸の領域において、さらには個々の詩人たちにあたって跡づけていこうというのが、今後の関心のむかうところである。

- 1) Dornseiff, F.: Die Griechische Wörter im Deutschen, 1950, S. 89.
- 2) Vries, J. D.: Forschungsgeschichte der Mythologie, 1961.
- 3) 天沼春樹:『神話概念の変遷 I』, 城西人文研究第15巻2号, 1987 所載
- 4) Betz, W., Vom, Götterwort zum Massentraumbild, Zur Wortgeschichte von Mythos, in Mythos und Mythologie in der Literatur des 19. Jahrhunderts, 1979.
- 5) Novalis はある書簡のなかで「ぼくがここという神話 Mythologie というのは、真実をきわめて多様に象徴する自由で詩的な詩作のことだ。」と語り彼のめざす創作形式である Märchen とはほぼ同義語として扱っている。この項に関しては、拙論(3)を参照されたい。Mythos の語義変遷への資料として以下の略年表をあげておく。

15世紀 Bibel/lügmere, lügmäre

16世紀 Luther/fabel

Dasypodius/erdichte Märe, Mythos, lataine fabula. 1536.

Simon, Rot/Fabula, Fabel, meer, einsag, Teutsche Dictionarius, 1571.

17世紀 Milton; Paladise Lost, 1667

Gotthart Heidegger, MYTOSCOPIA ROMANTICA, 1698.

- 18 世紀 Die teutsche Mythologie oder Beschreibung heidnischer Götter, 1712.
 Hederich, gründliches Lexikon Mythologikum, 1724.
 Adam, Fr. Kirsch/Mythos, indem quad Fabula vel Narratio, Fabel, Cornopia linguae, 1741.
 Klopstock, Messias, 1748.
 Chr. T. Damm, Götterlehre und Fabelgeschichte der alten griechischen und romantische Welt, 1763. ダムは神話のアレゴリー解釈の代表.
 Joh. Ad. Schlegel, Anton Banier (Euhemeros 的神話の歴史的解釈者) のGotterlehre を独訳する.
 Winckelman (1717—1768) Mythos を眼に見えぬもののアレゴリーの織物と評した.
 Heyne, Chr. G (1729—1812) Mythos は古代人の知識, 表現力, 客観化の能力の欠如のなせるわざとした.
 Herder, G. J (1744—1803) Urmythologie, Politischemythologie, Kunstmythologie の三段階を想定.
 Goethe/Da *μυθος* erfunden wird, werden die Bilder durch die Sache groß wenn es Mythologie wird, werden die Sache durch die Bilder groß. (Tagebuch, 5. 4, 1774)
 Karl, Philipp, Moriz; Götterlehre od. die Mythologischen Dichtung der Alte, 1791.
 Schelling; Über Mythen, historische Sage und Philosopheme der altesten Welt, 1792.
-

- 19 世紀 Campe/Mythologie, Fabellehre: Mythos, eine Dichtung; Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufdrungenen fremden Ausdrücke, 1801.
 Fr. Schlegel, Gespräche über die Poesie, 1819.
 Görres, Mythengeschichte der asiatische Welt, 1810.
 Jacob, Grimm, Deutsche Mythologie, 1835.
 Romantische Mythologen Kanne, A と Crenzer * Hegel Ohnemacht des Gedankens
 Nietzsche, Die Geburt der Tragödie, 1872.
 Bachofen, Mutterrecht の発見

R. Wagner, ゲルマン神話のイメージの大衆化

G. Freud, 無意識の発見, C. G. Jung 神話類型と集合無意識

20世紀 Sorel, G: Reflexion sur la violence, 1908, 政治スローガンとしての
Mythos des Generalstreiks.

Rosenberg, A: Der Mythos des 20. Jahrhundert, 1930, Blutmythos,
Martyrer des neuen Lebenmythus.

Bultmann/Entmythologisierung: Nenes Testament und Mythologie,
1941. Jaspers との《脱神話論争》

- 6) Nietzsche: Die Geburt der Tragödie, 1935, Gesammelte Werke 1, S. 179 f.
- 7) エリアーデ著作集7, 『神話と現実』, 中村恭子訳, 1977年, セリカ書房 S. 23 f.
- 8) Rosenberg, A.: Der Mythos der 20. Jahrhundert, München. 1938, S. 698 f.
- 9) 北欧神話で海には巨大なヘビが棲み, 「神々のたそがれ」のときにすがたを現して, トールに戦いを挑むとされている。
- 10) Rosenberg, A., a. a. O. S. 699. 尚, 引用の一部は, 吹田順助他訳を参照した。
- 11) E. カッシーラー: 『象徴・神話・文化』D. P. ヴィリーニ編, 神野慧一郎他訳, ミネルヴァ書房, 1985, S. 30s./Pechter, Heiz: Nazi-Deutsch. A Glossary of Contemporary German Usage, Newyork, 1944.
- 12) 拙論(3)参照。ギリシア語訳からの聖書では *μυθος* はしばしば「誤てる教え」「愚にもつかない作り話」と訳されていた。
- 13) Betz, W.: a. a. O. S. 24.
- 14) Handwörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Akademie-Verlag, Berlin, 1984.
- 15) 日本における翻訳語としての「神話」の成立の経緯は, 拙論『神話概念の変遷Ⅱ』(『城西人文研究』第13号, 1986年所載)を参照されたい。以下に資料として, 翻訳語略年表を付け加えておく。

幕末・明治 Mythos 翻訳語例

『波留麻和解』(江戸ハルマ)(寛8) 用例なし

『道訳法兒馬』(天保4) 用例なし

『諸厄利亜語林大成』本木正栄(文化11) 同上

バタビア石版『英和和英対訳辞書』(1830) 同上

『英和対訳袖珍辞書』, 堀達之助他撰(文久2) 小説物ノ類

『仏語明要』, 村上英俊撰(元治元) mythologie 神教

Hepburn, J. C『和英語林集成』, (慶応6) Shinden (神伝) Kischinron (鬼

神論)

- 司馬凌海,『和訳独逸辞典』(明 5) 形無キコトラ作ル術
- S. Eda,『孝和袖珍辞書』(明 5) シンガク, 神学
- 『独和字典』(明 6) 講釈, 昔話ノ類, 神学
- 柴田昌吉, 子安峻,『附音挿図英和字彙』(明 6) 小説, 虚誕, 妄説, 神伝
- 中江篤助校閲,『仏和辞林』(明 20) 太古の逸事, 虚妄, 無実
- 高木甚平, 保志虎吉,『独和新辞林』(明 29) 小説, 誕話, 鬼神譚, 神祇誌
- 文部省版,『百科全書』(明 11) 鬼神誌
- 福沢諭吉,『文明論之概略』, (明 9) 妄誕, 上古妄誕
- 加藤弘之,『国体新論』, (明 9) 神典
- 坪内逍遙,『小説神髓』, (明 18) 神代記, 神代史, 鬼神史, 鬼神誌
- 物集高見,『日本大辞林』, 明 27) 神典, かみよのことをかきせるふみ
- 高山樗牛,『古事記神代卷の神話及び歴史』 明治 32 年の神話論争
- 高木敏雄,『日本神話学の歴史的概観』(明 37) 日本神話学の開始
- 大西西崖,『希臘羅馬諸神伝』(明 44) 神伝, 神話
- 南方熊楠の用語例 神誌, 譚原, 鬼神説, 神伝, myth のまま
- 柳田国男／折口信夫 神語 (カミガタリ, カムコト)

(一橋大学講師)